

第十一章 京都 一 披露宴

郷子が、乱れた衣裳の身繕いを終えると、

「お部屋が決まりましたので、御案内いたします」

志乃が立ち上がって歩き出したので、郷子も付いていった。

部屋は、本殿と渡り廊下で繋がれた対屋の一つに位置していた。

「ここは、北の対屋の部屋でございます。北の方と呼ばれるに相応しい場所でございます」

「あなたと須美は、何処に居るのですか」

「この部屋の近くにそれぞれ小部屋を頂きました」

「まあ、それは心強いわ。ところで、静御前はどちらにいらっしゃるのでしょうか」

「義経さまは、この堀河館の他にも、六条室町に屋敷をお持ちで、静御前はどうかそちらのほうにお移りした様子でございます」

(義経さまも静御前もそれなりに私に気を使ってくれているのだ)

郷子は、静御前の配慮を感じ、心が軽くなった。

「須美はどうしていますか」

「須美殿は、どうやら政子さまに頼まれたものを買いに行かれた御様子です」

須美は、郷子の侍女という名目で派遣されているが実際には政子の都での出先機関のような役目をするらしい。郷子にとっては、志乃と二人のほうがかえって気が楽だったので、それを聞いても気にならなかった。

部屋に入るとどっと疲労を感じて、ともかく重ね合わせた桂を脱いで単衣になった。

有難い事にこの部屋には、湯殿が付属している。湯殿に入って、時間をかけて化粧と汗を流すと身も心もさっぱりとした。

部屋に戻ると、夕餉の支度がしてあった。漆塗りの大き目の食膳に綺麗に彩色された小さな椀や小皿が所狭しと置いてある。

京の料理は、少ない量の多くの品目からなるようだ。

どの料理も驚くほどおいしかった。

郷子は、都の華やかな貴族の暮らしは好きになれなかったが、料理は舌の肥えた貴族の恩恵を受けているのだろう、多彩な味の数々を楽しむ事ができた。

(用心しないとすぐに太ってしまうわ)

そう思いながらも食べる手を休める事が出来なかった。

夜暗くなると、雑仕女が灯台を持って入ってきて部屋に置くと、褥を敷いてそれを几帳で隠した。

次に義経付きの侍女が入ってくると

「すこし検めさせていただきます」

とって部屋の中の褥の下や鴨居の上や家具の中などあらゆるところを調べて回った。なにも隠していないことを確認すると、「着ている物を全て脱いでください」と言う。

郷子が、怪訝な顔をしていると、「慣例でございます」と有無を言わせない口調で言う。恥ずかしかったが、仕方なしに全てを脱いで、几帳の奥の褥に横たわると、侍女は、郷子の素裸の身体の上に白絹のふすまを掛け、郷子の衣裳を全部持って部屋から出て行った。

郷子は、灯台の頼りない明かりの中で天井を見ながら考える。

(きっと、義経さまは、まだ私のことを信用していないのだわ)

それも、今日の立ち回りを考えるといたしかたないと思う。

(これから、時間を掛けて信用してもらおうほかない)

遠くから、男達が酒を飲んで騒ぐ声がかすかに聞こえてくる。女の嬌声も混じっているようだ。きっと宴会をしているに違いない。そういえば、小太郎兄が義経さまは宴会好きだと言っていた。

長い時間が過ぎた。宴会も終わったようだ。それからまた長い時間が過ぎた。

(もう今夜は義経さまは来ないに違いない)

郷子は、ほっとして、強張っていた身体の力を抜いた。

義経のことや先ほどの出来事などをとりとめもなく考えていると寝てしまったらしい。

郷子は、部屋の中に人の気配を感じて、目を覚ました。

もう、灯台の火は消えていて、部屋の中は暗かったが、庭側の障子からの月明かりで男らしい影がしきりと衣服を脱いでいる。

郷子は、はっきりと目が覚めて、心臓の鼓動が早くなった。

(義経さまだろうか)

郷子は、頼朝が政子を次女と間違えた暗闇の逢引を思い浮かべた。

男は、素裸になって几帳の内に入ってくると白絹のふすまを上げて、郷子の横に潜り込んできた。

男は、「婚礼前の祝宴を開いてもらって、すっかり酔ってしまった」とぶつぶつ呟くとそのまますぐに寝てしまった。郷子が、半身を起こして、軽く鼻をかいている男の顔を確認すると間違いなく、義経その人だった。

郷子は、義経の顔をじっと見つめた。無邪気な顔で子供のように寝ている。

(この人が鶴越の奇襲で平家を打ち破り、都で英雄としてもてはやされている人物なのだ。その人物が私の横で素裸で無邪気に寝ている。そして、その人物は私の夫なのだ)

郷子は、飽きもせず義経の顔を見続けた。

先ほど郷子の腹の上に乗って両腕を押さえつけながら、顔を寄せて「この俺に勝てると思ったのか」とまるで腕白小僧のように得意満面で言った顔、「俺か、俺はお前の婿だ」と面白がっている顔、頼朝と政子の話をしたときに「そうか姉者がそんなことを申ししていたか」と嬉しそうに笑った顔、「兄者にお礼を言わなくてはならないようだな」とまるで珍しい物でも見ているような不思議そうな顔を次々と思い浮かべた。

(この人は、喜怒哀楽を率直に顔に表す人なのだ)と郷子は思う。

二人とも生まれたままの素裸だった。

半身を起こして、義経の顔を見ているとどうしても素裸と素裸の肌が触れあう。

郷子は、義経が腹の上に乗って両腕を押さえつけたときの感触を思い出した。

すると突然愛おしさが潮のように押し寄せてきた。

(私は、この人を好きになれる)

夜明け前になると、義経は、突然起き出して、郷子に手を伸ばしてきた。

その後のことは、郷子は、良く覚えていない。

義経のなすがままに嵐の中の小船のように翻弄されながら、この人は、女の扱いに慣れていると感じた。それは、義経が郷子の身体の中からいままで味わった事がない喜びの情感を引き出したことでも知れた。

二日後に、父の河越太郎重頼が郎党約百騎とともに都に帰還した。

郷子が、部屋に居ると、父が鎧直垂に小具足をつけたまま、案内もなしにずかずかと部屋に入ってきた。堀河館に到着しだい、着替えもせずに来たらしい。

「おお、郷姫久しぶりじゃのう。なかなか元気そうに見えるな。もう夜伽はすませたのか」つぶれたどら声で屋敷中に響き渡るような大声で怒鳴る。

郷子は、父親の無神経さに、恥ずかしいというより腹が立ってきた。

「いつもの通りお屋敷の誰にも聞こえるような元気のよい大声を聞いて安心いたしました。ご無事で何よりでございます」

「わしは不死身じゃ。心配には及ばない。それより、早く孫の顔が見たいものじゃ。婿殿には、わしより、しっかり気張ってもらおうようによくお願いしておくからな。おまえも精一杯張り切って受け入れなきゃならんぞ」

郷子の意図は伝わらず、さらに大きな声で怒鳴る。

「父上、まずは、旅の垢を落として、着替えされたらいかがでございますよう」

「そうだな、そうしよう」

父は、入ってきたときと同じように疾風のように部屋から出て行った。

父が、義経と郷子の結婚を小躍りするよう喜んでる事は確かだった。

その後、父は、湯を浴びて軽装の直垂に着替えると再度郷子の部屋を訪問した。

「さっき婿殿に会ってきたが、なにやらもう木刀で殴りかかったそうではないか。いったい何を考えておるのだ。婿殿は、わしの主君ぞ。わしは肝を冷やして平謝りにあやまったが、もう破談になっても仕方がないと一度は諦めた。しかし、婿殿は、面白かったと喜んでおられた。わしはまるで狐につままれたような話で驚いている。やや、そういえば、おまえの顔にすり傷が沢山あるな。婿殿に、投げられたのか。何があったか良く判らぬが、婿殿はおまえごときが百人かかってもかなうような相手ではないわ。なにしろ、天狗のように身軽で、あの怪力無双の武蔵坊弁慶でさえ、歯が立たなかった御仁じゃ。こんどの件は、大目に見てもらえそうだが、このような事は二度とあってはならぬことじゃ。

どだい、正室の役目は、良人を支え内助の功を尽くす事にある。おまえの武芸の稽古にし

ろ、良人を助けるために役に立つと信じたればこそ許してきたのじゃ。

その武芸を、こともあろうに良人に向かって使うなど言語道断でもってのほかだ。許しがたい愚行と言っていいだろう。いいか、一旦嫁入りすれば、河越の実家やその外全ての事に先んじて、良人のためになることをまず第一に考えなくてはならぬのだ。破談になったからといって、安易に実家に帰れると思ったら大きな間違いぞ。もう実家はないものと思え。いいかこの点を肝に銘じて、婿殿に尽くすのだ。判ったな。馬鹿な真似は二度とするではないぞ」

郷子は、長年の経験からこの父が一方的に自分の意見を言うだけで相手の話を聞くような耳は持っていない事はよく知っていた。父に言い訳しても無駄なことは明らかだった。

「ご心配をおかけいたして申し訳ございません」

「いいか、わしの言った事をよく胸に刻んで、もう心配を掛けるではないぞ」

父は、そう言うともた疾風のように部屋を出て行った。

婚礼の披露宴は、翌日、つくつく法師がうるさいほど鳴いている夕刻に挙行された。

この時代の一般の武士の結婚は男が女に恋文を渡し、色よい返事があれば女のもとに三夜続けて通い、三日目の夜に露頭（ところあらし）という婚礼が行われ、新郎新婦が親族や関係者に披露されるのが一般的だった。婿が嫁の家に入る婿入り婚なので婚礼への出席者は通常は妻側の親族や関係者のみであった。

しかし、親やその上司が勝手に決める政略結婚は、当然のことながら恋文のやり取りという本人同士の同意を欠いたままに、婚礼が行われる。また、政略目的は敵対的關係になりそうな勢力のあるもの同士の融和のための結合あるいは勢力のあるものに対して従属の意を表すための結合であるのが普通だから、広く公表される必要があり婚礼に招待される外部の関係者の客も多い。

義経と郷子の結婚は、政略といっても、普通の場合の目的とはかなり異なる。しかも、嫁が河越から遠路はるばる京に居る婿の所まで遠征して嫁入りする結婚だから、出席できる親族も、義経の方は皆無であり、郷子の方も父と兄二人である。義経には従五位下檢非違使という官位と官職はあるが、本来武家同士の婚礼だから、貴族などは呼ばないし、呼んでも来ないだろう。

ただ、義経は、京では頼朝の代官として都の守護を全面的に任されている源氏の総大将であり、賑やかな事が大好きな男であるから、婚礼には全ての部下が招待された。

本殿の大広間の奥の一段高い位置に、萌黄の直衣と指貫の袴、立烏帽子という貴族風の衣裳を着た義経と、その隣に桜重、菖蒲、下紅梅の桂を重ね着した郷子が並んで座している。郷子は、顔から襟足、胸元のみならず両手まで、とにかく外に晒される素肌は、全て、白粉を刷毛でべったりと塗られた。口には真っ赤な紅を、眉毛には真っ黒な墨を塗られた。鏡を見てみると別人のような自分が写っている。確かに、自分で見ても（そう悪くはないわ）と思うが、とにかくべったりと塗られた白粉が気持ち悪い。その上、化粧をしてくれ

た侍女が顔の表情を崩さないようにと注意した。特に笑っては絶対に駄目だという。白粉が乾いてくると、ぼろぼろになって、笑うと皺がよって、剥げるのだという。

都の女性が色白で美しいが能面のように表情を変えないという背景には、このようなからくりがあったのだ。しかも、この白粉には、鉛が入っているので、長くつけていると、鉛毒で顔の表面が痘痕になるという。

郷子は、この婚礼が終わったら、二度とこのようなお化粧はしないと心に決めた。

一段下がった一番近い位置に、郷子側には父の河越太郎重頼と二人の兄、小太郎重房と三郎重員が親族として控えている。義経側には、袈裟を着た大男の法師武士や髭づらの侍や兄弟らしい若侍やその他得体の知れない様子をした侍などが介添えとして控えている。義経の側近に違いない。その外、主要な武士は大広間に、それ以外の一般の侍や軍兵は本殿前の前庭に筵を敷いて座っている。おそらく総勢参百人以上になるだろう。

婚礼といっても、新郎新婦の披露が目的で特別の儀式があるわけではない。

参加者が一通り揃ったところで、新婦の親族を代表して河越太郎重頼が立ち上がって義経に一礼すると、どら声を張り上げて挨拶を始めた。

「鎌倉殿の仲人で、源氏の嫡流源九郎判官義経殿に河越家の長女郷姫が、輿入れする事になりました。ここに目出度く婚礼が整いました証として披露宴を開催できます事は、新婦の父として望外の喜びであります。

鎌倉殿のご意図は、ご自分の乳母である比企尼の孫である安達藤九郎盛長殿の長女紗江を範頼殿の正室とし、また、某の長女を判官義経殿の正室とすることによって、鎌倉殿、範頼殿、義経殿の兄弟の紐帯を強めることにあります。我々源氏の郎党といたしましては、ご兄弟三人のより一層の血縁の結束の下に、早急に平家を討ち滅ぼし、義朝殿のご無念を晴らして、源氏の世が一日でも早く達成できますことを深く祈念するものであります。また、個人的には、判官義経殿のお世継ぎである孫を出来るだけ早くこの爺の腕に抱きしめたく、婿殿には、夜討ち、朝駆け、食前、食後攻めまくってもらい、その成果を誕生させていただきたく切にお願いする次第でございます」

重頼がまた義経に一礼して挨拶を終えると、どかっと腰を下ろした。

郷子は、今始まった事ではないが品があるとは言えない父親の挨拶にいつもながら困ったものだと思う。貴族がいなくてよかった。しかし、周りをみまわすと無骨な侍大将の気取らない挨拶は、受けているようだ。みんな笑いながら手を叩いている。

それとなく、隣の義経を伺って見ると、機嫌良さそうに口元に微笑を浮かべている。

郷子は、ほっとするが、義経と自分の縁組を仲人した頼朝の真意が、別にあることを知っているために、義経本人や父親を含めてここに居る全員がそれを知らないのだと思うと、素直に披露宴を喜ぶ事が出来なかった。

父親の挨拶が終わると、数名の主要な武士が次々に立って、新郎新婦にお祝いの言葉を述べた。

それが終わると、山海の珍味を盛った大皿と酒が次々と着飾った女房によって運び込まれ

た。これほど多くの女房がどこから集められたのだろうか。

恐らく、都には、こういった祝宴を請け負う料亭があるのだろう。料理と女房は、そこから提供されているに違いない。

祝宴の準備が全て整うと、巫女のような衣裳を着た童女が出てきて義経の前に座ると片口と呼ばれる長柄銚子で義経の盃にお神酒を注いだ。

義経は盃に注がれた酒を一気に飲み干す。

少女は、つぎに郷子の前に移動すると、郷子の盃にお神酒を満たす。郷子が、中の酒を目を瞑って飲み込むと暖かいものが、喉をつたわって腹の中に入って行く。

婚礼の固めの儀式は済んだ。

（義経さまは、わたしを受け入れてくれた）

安心感と共に幸福感がじんわりと身体を包むのを感じる。

（いろいろ心配したが、義経さまと結婚してよかった）と郷子は心から思った。

それを待っていたように、義経の側近であろう袈裟を着た大男の法師武士が立ち上がって、腹に響くような野太い大声をあげて一席ぶち始めた。

「新婦が、河越太郎重頼殿の長女というから、どんなに不細工な女かと思っていたら、重頼殿とは似ても似つかぬ美人なので、滅多な事では驚かない某も腰を抜かすほど驚いたぞ。鳶が鷹を生むというが、今回ほどそれを実感した事はないわ」

「ふん、お主のような海坊主に言われとうはないわ」

重頼がどら声でやり返す。

（父とこの法師武士は、仲がいいのかもしれない。それにしても、この怪物のような大男の褒め上手には、びっくりしてしまう）

「それでは、美男美女の新郎新婦を祝って、今宵は京の酒をみんなで飲みつくそうではないか。みんな酒を持ったか。では、乾杯するぞ」

大男が、「乾杯」と怒鳴ると、宴会に参加した全員が「乾杯」と唱和して、盃の酒を一気に飲み干す。

郷子は、時々母が父にしているように、手前に置かれた瓶子を手にとって、義経の方に向くと、義経も心得て盃を差し出す。郷子が酒をそそぐと義経が盃をあけて、郷子に返杯する。郷子も、その盃を受けて義経から酒を注いでもらうと一気に飲んだ。

身体が温まっていい気持ちになってくる。

義経が、雛壇を降りて義父となった重頼や義兄となった重房と重員と何か話し始めた。

郷子も、瓶子を持って、雛壇を降りると先ほどの袈裟を着た大男の法師武士に向き合って酒を薦める。

「あなたは、かの有名な武蔵坊弁慶さまですか」

「ほう、某の名声は、東国の河越まで鳴り響いていますか」

「なにしろ義経さまと弁慶さまの五条の大橋での大立ち回りは有名でございます」

「ははは、何処かに、事実を十倍に膨らまして、面白おかしくして、噂を流す名人がいる

らしい。その話は、後ほど詳しく話して差し上げよう。それより、我々の仲間を紹介しておきましょう」

弁慶は、順に名前を挙げて言った。

「この伊勢三郎義盛は、もと鈴鹿で盗賊の親分をしていた男だ。口八丁手八丁の交渉上手の切れ者だが、悪いことに女にも手が早い」

「馬鹿を申せ。お前のように女に無関心な男と違って俺にはかわいい妻がいるのだぞ。知っておろうが」

「ははは、そう向きになるな。冗談だ。次の二人は兄弟で義経殿が奥州藤原氏から黄瀬川宿に陣をはっていた頼朝軍にはせ参じたときに、藤原秀衡公が最も信頼する若手を従者としてつけてくれた。名前は兄が佐藤継信、弟が忠信という。さすが奥州十七万騎の中から選ばれただけあって、武術が優れているばかりではなく秀衡公の言いつけをよく守って義経殿に仕える忠義者だ。俺はいままでこんな優秀な兄弟には会ったことがない」

「弁慶殿にそんなに褒められると、気味が悪くなって尻がむずむずしてきますぞ」

「ははは、今日は目出たい婚礼だ。とびきり奮発したまでよ。なにしろ褒めるのは無料だからな、安上がりなものよ」

「どうせそんなことだろうと思った」

郷子は、先日部屋に案内してくれたのが、兄の継信だったことに気がついて会釈をした。

「片岡八郎為春は、所領を没収されて困っているところを判官殿に救われた力自慢の男だ。鷲尾三郎経春は、もともとは獵師だった少年で、義経軍が一の谷に向かう途中で鶴越までの抜け道を教えてくれた。その時には名前がなかったが、義経殿が案内してくれたお礼に自分の義経の一字を取って経春という名前を与えた。

それから順繰りに奥州商人あがりの堀弥太郎景光、紀州熊野の鈴木党の残党亀井六郎重清、園城寺の僧兵常陸坊海尊、もと獵師の駿河次郎清重などのそうそうたる輩がいる」

名前を言われたものは、笑顔を向けて軽く会釈をする。

郷子も、会釈を返しながら、この出自の多様な側近達に興味を尽きなかった。

「みんな一癖も二癖もある連中で世間からはみ出したあぶれ者の集団さ」

「でも、みなさん仲がよろしそうですね」

郷子は、見た通りを言った。

「みんな一匹狼だから一つにまとまって行動するのは難しいように思われているが、みんなに共通していえる事は、義経殿が好きだということだ。それでみんな仲良く纏まっているのさ」

「御紹介していただき有難うございました」

郷子は、弁慶に礼を言って席に戻ったが、この個性的な集団が纏まっているのは、義経の魅力であることには間違いないが、弁慶の巧みな統率力も寄与しているのではないかとふとそう思った。

義経はと見渡すと、前庭に降りて、軍兵たちの間を回っている。義経が行く先々で、何か

言うと、わっと歓声が上がる。どうやら、義経は軍兵に人気があるらしい。軍兵の間を一通り回ってくると、今度は側近の前に座り込んだ。義経は、刀を構える仕草をしたり、何かを投げ飛ばしたり、上に載って押さえつけたりと身振り手振りを加えながら話している。きっと先日の郷子の武勇伝を面白おかしく話しているに違いない。

(好き勝手にわたしを虚仮にしたらいいわ) と小さく呟くが、義経の様子から悪意は感じられない。

義経が、話しているとみんなは腹をかかえて笑っているが、ちらちらと郷子を見る目には、温かみが籠っている。

義経は、ひっくり返って手と足をばたばたさせている。どうやら、仰向けになった郷子が、重い衣裳と格闘しながら起き上がろうとしているらしい。みんなの笑いも最高潮に達して、身体をくの字に折り曲げ手で畳を叩きながら喜んでいる。

義経が席に帰ってきたので、訊いてみた。

「何をお話になっていたのですか」

「お前が、仰向けに倒れた様子が、まるで、亀が裏返しになってばたばたしている様子とそっくりだったと言ったらみんな喜んでいたよ」

「まあ、そんな戯れ言を」

「その時、胸元と裾が乱れて大層色っぽかったよ」

「そんなことまで話したのですか」

「ははは、受けたな。この話は」

「まあ、人を馬鹿にして。いい加減にしてください」

「ははははは」

この瞬間、郷子は、形だけではなく心の通った真の夫婦になれたとの実感を得て、えも言われぬ感動を覚えた。自然に内から湧き上がってくる歓喜で口元が緩む。

しばらくすると、みんなのオーという歓声と拍手が沸き起こった。

静御前が、頭に黒い烏帽子を被り、緋色の桂に薄絹の内掛けを纏い、紅もみじの長袴に白鞘巻の刀を穿いて、手には檜扇を持ち、宴会の参加者全員が見ることが出来る本殿の大広間の濡れ縁に現われたのだ。

彼女の美貌と華やかな衣裳に感嘆のため息が漏れる。

さすがは、都第一の白拍子ともてはやされるだけの絵になるような美しさである。

静御前は、新郎新婦に向かって一礼すると、檜扇をぱっと開き、後ろに控えた鼓、笛、銅鑼などの音色にのって舞い始める。緩やかな出だしから次第に早く激しく、そしてまた緩やかに舞い、それに連れて華やかな衣裳が風に吹かれたように、ある時は緩やかに、またある時は激しく揺れる。

静御前は、今様を唄い出す。

神山の岩根の松は言わねども

ちとせを緑の色に知り
峰の嵐は音せねど
万歳の響きぞ耳に満つ

祝いのためしに ひかるるは
春日の峰の姫小松
八千代に咲く玉椿
糸貫川に住む鶴
長井の浦に遊ぶ亀

数日前に郷子に披露したのと同じ内容だ。

恐らく、祝いの席で唄われる今様なのだろう。

朗々と響く唄声といい、手の指、足の先まで神経が行き届いた見事な舞に、見ているものは、みんな飲むのも食べるのも忘れて酔いしれている。

唄が終わり、舞が終わっても、しばらくは余韻を楽しむかのように、静寂が支配するが、その後は、割れるような拍手と歓声に包まれる。

「日本一」

誰かが、声を張り上げると、多くの武士や軍兵が唱和する。

静御前は、刀を取って脇に置き、檜扇を胸に差すと、長袴の裾を引きずりながら、義経の前まで行って、笑顔で一礼すると横に座る。それから瓶子を取って義経にお酌をしながら何か話しかけている。それに機嫌良く応答しながら義経が一気に盃を空けて、返杯すると、静御前は悪びれる様子もなく受け取り、義経から酌をしてもらってその盃を飲み干す。

郷子は、宴会の参加者全員が息を詰めて義経と静御前の挙措を見守り、また、郷子の様子をちらちらと盗み見る視線を痛いように感じる。話し声はおろか、食器の触れ合う音もしない。松明が燃えているじじじという音が聞こえるほどだった。

静御前が、義経の前を離れて、郷子の前に座った。

丁寧に一礼すると言う。

「おめでとうございます」

静御前は瓶子を取り上げると郷子が差し出した盃に酒を注ぐ。

「有難うございます」

と郷子が返答して、その盃を飲み干すと、静御前は、一礼して立ち上がり、刀を持つと静々と部屋から出て行った。

息を詰めて見守っていた人々の緊張が緩んで、静寂に包まれていた宴会が再び話し声や食器の触れ合う音でまた一段と賑やかになった。

郷子にどっと疲労感が押し寄せてきた。

郷子が、義経に一言断って座を退席し、湯殿で全ての化粧を落として部屋に帰ると、また

例の侍女が褥の前で待っていて、全ての衣裳を脱げと言う。

郷子が「婚礼は終わりましたのに？」と疑問を呈すと、「いえ、規則ですから」と頑固に言い張る。仕方なしに、また、素裸の上に白絹のふすま一枚を掛けて寝ていると、深夜に義経がまたもぞもぞと衣服を脱いで、隣に潜り込んでくる。

「静に怒られた」とぶつぶつ言って、そのまま寝てしまった。

郷子は、思う。

（この人は、正室との婚礼の夜に、妾のところに行ったのだ。そして、妾から諭されて、戻って来たに違いない。誰かが言っていた。『嫉妬だけはするな。女の嫉妬ほど醜いものはないからな』男の勝手な論理に違いないが、自分は、これを受け入れようと思う。もともと静御前と義経さまは、頼朝さまによって自分が正室として送り込まれる前から愛人関係にあったのだ。義経さまの正室として暮らしていくためには、二人の関係を認めて自制するしかない。義経さまの全てを独占しなくても、その一部だけでも所有できれば十分幸福な気持ちになることができる）

こう考えると、郷子は、心が軽くなって、そのまま深い眠りに落ちていった。